HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アメリカ中西部における「日本理解」のためのクラス運営 ： ウィスコンシン大学での試み ("Understanding Japan", Spring, 1999)
Author(s)	眞崎, 睦子
Relation	第25回「国際理解教育賞 エースジャパン賞」受賞作品（帝塚山学院大学国際理解研究所主催, 朝日新聞社, 日本教育新聞社等後援）, 2000年
Issue Date	2000-01-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/62200
Type	journal article
File Information	understanding_japan.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

アメリカ中西部における「日本理解」のためのクラス運営

－ウィスコンシン大学での試み ("Understanding Japan," Spring, 1999)－

Teaching "Understanding Japan" in the Midwest, USA

--Observations at the University of Wisconsin Oshkosh, Spring 1999--

2000 年 1 月 31 日提出

大阪大学大学院言語文化研究科

博士後期課程 2 年

横田睦子

Mutsuko Yokota

1. はじめに

1998年9月から1999年6月まで、アメリカ中西部に位置するウィスコンシン大学で二つの講義を担当する機会を与えられた。衛星放送による遠隔地教育システム(Distance Learning System) を利用してオシコシ校 (University of Wisconsin Oshkosh)とスティーブンスポイント校 (University of Wisconsin Stevens Point)の学生に授業を行う「日本語」のクラスと[1]、オシコシ校における「日本理解」のためのクラス、“Understanding Japan”である[2]。本論文は後者、“Understanding Japan”のクラス運営についての一考察である。

筆者は第一回目の講義で、受講者たちの日本に対する理解が、アメリカ中西部においてもっとも新しいアジア系移民として知られているモン族(Hmong)[3]への理解、或いは誤解、偏見と無縁ではないことを知る。そこで筆者はこの講義の基本的な目的を、決められたテキストの内容を学ぶという形の「日本理解」にとどめず、受講者を取り巻く地域社会を構成する人々、文化と絶えず関連させながら、日本社会についての理解を深めていくというクラス運営を目指した。本論文では、ロール・プレイ[4]などの方法を導入した授業、毎回授業終了前に受講者が記入、提出をした “Today’s Comment”（「本日のコメント」）の内容、ゲストスピーカーらの話に対する受講者の反応などを改めて考察する。そして、日本社会及び日本人にほとんど接することがなかった地域の学生達が、どのようなプロセスで、一部のメディアが助長するような偏った日本理解を再考し、独自の日本社会像を構築していったか、総じて異文化理解へのヒントを自ら獲得したかを紹介する一つの実践の記録である。また、日本でも、その導入をめぐって議論がなされている受講者による授業評価についてもふれ、この試みが受講者たちにどのように映っていたかを今後の課題として検討する。

2. アメリカ中西部とウィスコンシン大学オシコシ校

アメリカ各地の多くの自治体や教育機関で日本語、日本事情に関する講義が開講されている。しかしその内容はそれぞれの地域の特性を考えると一律ではないはずであると筆者は考える。例えば、日本人、日系アメリカ人を含むアジア系人口が比較的多いアメリカ西海岸などの都市部と、シカゴ（イリノイ州）やマディソン（ウィスコンシン州）などの一部地域を除くとアジア系アメリカ人が極端に少ない中西部とでは自

ずと違ってくるはずである。中西部とは一般にアパラチア山脈の西、ロッキー山脈の東、そしてオハイオ州、ミズーリ州、カンサス州以北の広い地域を指すが、このうち「典型的な中西部」とは五大湖をを取り囲むように位置する地域を意味するという[5]。筆者が10ヶ月滞在したウィスコンシン州オシコシは人口5万5千、中西部の典型的な、つまり、アジア系アメリカ人の数が少なく、一般に保守的な、小さな大学の町である[6]。ウィスコンシン州は約半数の住民がドイツ系であることで知られているが、オシコシの町でも "German Catholic"（ドイツ系のカトリック信者）という表現をよく耳にした。町に点在する教会は圧倒的にカトリックの教会が多く、カトリック信者の割合は80%以上ともいわれている。ウィスコンシン大学オシコシ校（以下、UWOと略）は学生数1万5千、このような近隣地域の住民に広く開かれた学びの場となっている。

Race	Population	(18 years and over)
Total	55,006	(43,497)
White	52,945	(42,202)
Black	435	(349)
American Indian and Alaska Native	273	(203)
Asian and Pacific Islander	1,201	(628)
Other Races	152	(95)

（表1）オシコシの年令別人口、人種

1990 年実施の国勢調査結果より作成。（　）内の数字は 18 歳以上の人口である。18 歳以上の人口のうち、Black American、 Indian and Alaska Native 、Asian and Pacific Islander、 Other Races の数字はウィスコンシン大学オシコシ校の学生が占める割合が大きい。Other Races は本人の申告によるもので、例えば人種ではなく宗教その他の信条などによるカテゴリーに自身を分類しているものも含む。この表の人種に関する表現は国勢調査で使用されているものである。

3. "Understanding Japan" Spring, 1999

3-1. 受講者たち

UWOの国際関係学部(Department of International Studies)では毎年、 "Understanding Japan" と称して、日本理解のためのクラスを開講している。筆者が担当したのは1999年春学期、週一回、午後6時から午後9時までの3時間のコースであった。受講者は正式に登録した13名の学生、そして毎回1～2名の聴講希望者が加わった。アメリカでは一旦社会に出て大学に戻る学生、仕事の合間に大学で単位を取得する学生などを

ノントラディショナル・スチューデントと呼ぶが、筆者のクラスにも4名（高校教員、専業主婦 各1名、会社員2名）のノントラディショナル・スチューデントが出席していた。人種的には日本人留学生1名、インド人留学生1名を除くとほとんどが近隣地域出身のヨーロッパ系アメリカ人であった。受講の動機は、日中は仕事や他のクラスがあるため開講時間の都合がよかった、国際関係学部では異文化（自国であるアメリカに対して）に関するクラスの単位が必修であるなどというもので、特に今後アジア研究、日本研究を専攻したいなどの積極的なものはなかった。

3-2. 講義目的、概要

この講義は毎年、社会人類学的アプローチから行われており、講義の目的は以下の4点からなる[7]。

(1)　日本社会を概観する

(2)　日本及び日本の人々の倫理や哲学を学ぶ

(3)　アメリカ社会と日本社会の共通点、相違点を探る

(4)　日本社会を説明する専門用語を学び、その背景を理解する

テキストは過去数年に渡って使用されているものをそのまま使用することになった[8]。受講者の成績は中間試験、期末試験のほか、個々の研究発表とそれに基づくレポート提出などで総合的に評価される。筆者はこれら例年の講義目的、内容から逸れることがない範囲で、このクラスを運営することになったのだが、新たに加えたのが "Today's Comment Sheet"の記入、提出である。日本語にすると「本日のコメント」である。毎回授業終了前に、(1)その日の授業でもっとも印象に残ったキーワード、そして (2)授業内容に関する質問、担当教員（筆者）や他の受講者に対する反論などを自由に書いてもらうことにした。次回の授業冒頭で受講者のコメントに対する回答をする他、興味深いと思われるコメントを紹介し、新たな問題提起をするものである。この Today's Comment Sheet が思いのほかこのクラスの運営に影響を与えたことについては後で述べたい。

講義スケジュールは以下の通りであった。

Class Schedule

February 2	Orientation and general introduction
February 9	Lecture on "Japan, Now"　Meeting some Japanese people in a film I
February 16	Land and nature of Japan　Origin and history of Japan
February 23	The house and family system of Japan, What is the ***Ie***?
March 2	Education in Japan
March 9	Religion in Japan
March 16	(No Class: Spring Recess)
March 23	Meeting some Japanese people in a film II
March 30	Working in Japan, Women in Japan
April 6	Government and Economy of Japan
April 13	"Japan" in the U.S., "Japanese American"
April 20	Presentations and discussion
April 27	Presentations and discussion
May 4	Presentations and discussion
May 11	Final Exam

3-3.　クラス運営の実際

本稿では 3-2.で紹介した講義内容のうち、第１週の授業（２月２日、オリエンテーション）、第４週（２月 23 日、The house and family system of Japan　What is the ***Ie***?）、第５週（３月２日、Education in Japan）の授業を取り上げ、その内容を紹介、改めて考察する。

3-3-1.　２月２日第１週、Orientation and general introduction
－地域社会におけるアジアと日本、モン(Hmong)について－

最初の授業は **3-2.**の内容を記したシラバスを配布し、受講者に自己紹介と受講の動機[9]、これまで接したことがある「日本」、「日本人」、現在持っている「日本及び日本人に対するイメージ」等に関して簡単に述べてもらうことから始まった。以下はそのうちの五例である。

(1) 小学生の時、クラスに日本から男の子がやってきた。とても小柄でおとなしかったけどいい奴みたいだったよ。それが日本人のイメージになった。（男性）

(2) 日本というと美味しい日本食のことくらいしか思い浮かばない。(女性)

(3) これまで日本人と親しく付き合った経験はない。時々、勤務先に日本からエンジニア（男性）が派遣されてくる。日本人は小柄で静かで勤勉であるというイメージを持ってもっている。あなた（筆者のこと）は私がこれまで会った日本人女性の中で一番大きいわ。(女性、会社員)

(4) ルームメイトが日本で一年間英語を教えていた。時々彼と一緒に日本の映画を楽しんでいる。特にサムライが出てくる映画は興味深い。(男性、高校教員)

(5) 大学内で日本人留学生のチューターを務めたことがあり、それからなんとなく日本や日本のスポーツなどに関心を持つようになった。(男性)

というものであった。(1)と同様の内容を述べたものが 13 名中 3 名いたことは興味深い。小学校にやってきた日本人がおとなしかったというのは、恐らく異文化適応初期の段階にあったことが考えられる。意外だったのはこのクラスの受講者がいずれも日本のアニメーションについて全く触れなかったことである。他に筆者が担当していた日本語のクラスでは日本のアニメーションが日本語や日本事情について学ぶ強い動機になったと述べるものが数名おり、日本のアニメーションの普及に改めて驚いたものである。

この第一回目の授業で筆者は以下のように受講者たちに問いかけた。

> あなた方は今から日本社会と日本人の生活、行動様式について学ぼうとしています。私はアメリカでも日本でも出版されている様々な日本研究に関する書物を何冊か読みましたが、その中に時々 "the Japanese" という日本人や日本社会の構成員をひとくくりにしているような表現を見つけて躊躇することがあります。これに対して特別な例を除いては "Americans" に "the" がつくことはほとんどないそうです[10]。ひとくくりにできないのは何もアメリカに生きる人々だけでなく、他の国々の人々に対しても言えることを理解して下さい。このクラスの中でも、使用するテキストや参考文献でも "the Japanese" という主語が使用されるかもしれませんが、それはあくまでも社会全体ではなく、「傾向」を述べているものだと前置きさせて下さい。私が恐れているのは客観的に記されたテキスト等の教材を使用するものの、「私」という日本から来たたった一人の独断と偏見に満ちた人間が主観的に授業をすすめ、日本との接点がほとんどない受

講者の皆さんに偏った日本観を植え付けてしまうことです。日本人は一枚岩ではないし、日本社会も同様です。ところで念のため確認したいのですが、あなた方の中に「典型的なアメリカ人」の方はいらっしゃいますか？

最後の質問はいささか誘導尋問気味であったと反省している。クラスの中では成績という結果が出るまでは、評価する側とされる側というある種の利害関係が発生する。その意味でこのような質問は避けるべきであった。もちろん「典型的なアメリカ人」として名乗りをあげるものは一人もいなかった。

この後、主として欧米で日本を含むアジア的なもの、オリエンタルと呼ばれるものが歴史的にどのように理解されてきたか、黄禍論[11]、サイードによる『オリエンタリズム』[12]から西洋と東洋の二項対立関係などを板書し、紹介した。

The West（西洋）	The Orient（東洋）
Progressive（進歩的、前進的）	Reactionary（反動的、復古的）
Civilized（文明化）	Barbarian（野蛮）
Intellectual（知的）	Animalistic（動物的）
Active（活動的、活発）	Inactive（怠惰、静止）
Democratic（民主的、民主主義の）	Despotic（専制的、独裁的）

←development（発展の方向）

（図１）サイードによる西洋と東洋、発展の方向[13]

この日の “Today’s Comment”から受講者のコメントをいくつか紹介したい。

(1) オリエント、オリエンタルという言葉からは食べ物のことしか考えたことがなかった。

(2) 考えてみると日本人、特に日本の女性をステレオタイプで論じることがよくある。典型的なアメリカ人がいないように典型的な日本人もいないはずである。

(3) 人種や異文化について学ぶことには学校教育でも力を入れているが、今でも現実の社会では100年以上前に植え付けられたアジアや日本に対するイメージはそう変わっていないと思う。

(4) アジアや日本のことを学んだが、正直な話、日本と韓国と中国がどうちがうのかわからない。Hmong（モン）との違いは何ですか?

(5) 今日紹介された東洋のイメージは今では日本や他のアジア諸国というよりも

Hmong（モン）に付されている。

最初の授業終了前に提出された"Today's Comment"15枚（この日は日本人留学生2名が聴講に来ていた）のうち、三分の一にあたる5枚に(4)や(5)のようにHmong(モン)について言及しているものがあった。

受講者たちが引き合いに出したHmong（モン）とは一体誰だろうか。ここでいうHmong（以下、モン或いはモン族）とは主にラオス高地のモン族を指す[14]。ヴェトナム戦争当時アメリカ側の傭兵として戦ったのがモン族であった。1975年のサイゴン陥落後、難民化し、タイのキャンプを経てアメリカへ渡ってきたのである。このようにして西部のカリフォルニア州、中西部のミネソタ州とウィスコンシン州にモン族の三大コミュニティが形成された。このうちウィスコンシン州には全米のモン人口の18%にあたる16,980人が居住している。ウィスコンシン州内のアジア系アメリカ人の総数は52,369人である[15]。この数字は全米総人口の1.1%にすぎない。しかしモン族はウィスコンシン州においてアジア系アメリカ人人口の三分の一を占めることになる。受講者たちがアジアと聞いてモン族とその文化を想像するのは極めて自然である。

モン族はアメリカ政府から経済的援助を受けていること、コミュニティの中でいまだ彼ら独自の慣習法や生活様式を守るものが多いこと等から、彼らと地元住民との摩擦が社会問題ともなっている。彼らがどのような経緯でアメリカに渡ってきたのか、或いはなぜ政府から援助が受けられるのか地元住民の理解は十分とは言えないのである。筆者は翌週の授業冒頭で他のアジア系移民の歴史的背景を簡単に述べ、ヴェトナム戦争後に政治的難民としてアメリカに渡ってきたモン族についての説明を加えた。これをきっかけに筆者は大学内のアジアン・スチューデント・アソシエーションとその一部会であるモン・スチューデント・アソシエーションに参加させていただくことになり、メンバーの皆さんから多くを学んだ。知り得た情報は逐次授業の中で紹介させていただくことになった。

3-3-2.　2月23日第4週、 What is the *Ie*?
－「イエ」とは何か、 ロール・プレイの導入－

この日の授業の目的は日本の「イエ」という概念を理解することだった。テキスト、*Understanding Japanese Society*の著者、Hendryもイエをローマ字で"*Ie*"と表記し、

日本社会を読み解くキーワードとして繰り返し引用している。後続のテーマについて学んでもらうためにも、イエが単なる建築物の「家」ではないことを、受講者に十分理解してもらわなければならない。受講者は予習課題としてテキストのイエについて書かれてある箇所を読んで来ることになっていた。Hendry はイエが祖先から伝え継がれる血族集団であること、旧民法の家制度の内容などを紹介し、これが会社、学校などの日本人の集団における行動様式の基盤となり日本社会に秩序を与えていると結んでいる。

イエ――この目に見えないものをより具体的に受講者に把握してもらうためにはどうしたらいいのか。筆者がとった方法は、ロール・プレイの導入であった。受講者一人一人に役割を与え、演じることによって理解を深めてもらうという試みである。筆者は以下のようなカードを受講者に渡した（図 2)。

I really love Dorothy.　However I can not get married to her.
Why?　My family is a very conservative Catholic family.
They are unbelievably religious.　I do not think they welcome
Dorothy as a new member of our ***Ie***.　She is an atheist.
I wonder if I should find another girl friend for my ***Ie***...

（図 2）ロール・プレイ カード①

筆者はこのように *Ie*（イエ）という表現を含む独白調の台詞を創作、受講者に演じてもらった

（訳）僕は本当にドロシーを愛しているんだ。でも彼女とは結婚できない。なぜかって?僕の家族はとても保守的なカトリックなんだ。みんな信じられないほど信心深い。彼らがドロシーを僕たちのイエの一員として歓迎するとは思わない。彼女は無神論者なんだよ。僕、イエのために他のガールフレンド見つけるべきかなあ。

(図 2)のロール・プレイ カード①ではイエの宗教がカトリック、しかも家族全員が敬虔な信者であるため、無神論者である恋人のドロシーとは結婚できない、イエのために他のガールフレンドを見つけるべきかと悩む青年の独白である。カトリックを引き合いに出したのは周辺の地域住民の多くがカトリックの信者であるということを踏まえたためである。受講者は教室の中でイエ(***Ie***)という表現を含む独白調の台詞を読むことにより、架空の世界の疑似体験をするのである。できるだけ受講者の自己投影が容

易になるような要素、例えば(1)地域社会に関連のあるもの（地名、多数派の宗教など）、(2)普遍的なもの（結婚、子供の教育など）を盛り込んだつもりである。ちなみにこのカードは男性の台詞であることから男性の受講者に読んでもらった。

他のカードの内容も一部日本語で紹介したい。

ロール・プレイ カード②

僕、本当は宇宙飛行士になりたかったんだ。でも僕は一人息子、そして僕のイエは代々アップルトン（実際にある近隣の町名）で小さなホテルを経営している。おじいちゃんもお父さんも僕が成長して後を継ぐのを楽しみにしていたのさ。イエのために夢をあきらめたことを後悔しているかって?夢は夢、今はこのホテルを盛り立てていくのが生き甲斐なんだ。これが僕のイエだよ。（男性の受講者が朗読）

ロール・プレイ カード③

結婚して十年、子供にも恵まれてみんなが私のことを幸せな主婦と思っている。本当にそうかしら。夫と結婚したというより、このイエのために結婚したんじゃないかって思うことがあるわ。「このイエにふさわしい嫁」といって迎えられたのはうれしいけど、私はイエと結婚したんじゃない。子供の教育方針までイエの伝統に従うなんてまっぴらよ。私、このイエに合っていないのかもしれない。（女性の受講者が朗読）

この方法は思いのほか有効であった。日頃から活発な受講者たちがこの日は特に積極的に授業に参加し、ロール・プレイ カードを手に生き生きと「イエ」に悩む人たちを演じてくれた。そしてこの「イエ」という概念が家族や親族を超えて組織や集団に適用され、その構成員であることを意識するということがどういうことなのか、文字どおり体得してくれた。

もちろんロール・プレイで楽しみながら学ぶことに加えて、関連のある「理論」も学んで欲しい。イエに始まって日本の組織や集団を説明する上で筆者が援用したもののうち、もっとも受講者に受け入れられたのは *Reading the Japanese Mind* の次の一節であった[16]。

If Japanese society is one great box, the groups and organizations within it are also boxes within or contiguous to other boxes. ... They are trained

from birth to be "social box animals," ... .

（拙訳）日本社会が一つの大きな箱だとしたら、その中にある集団や組織もまたその中にあるかあるいはそれに連なる他の多数の箱なのである。日本人は生まれた時から箱の中で生きる社会的な動物として訓練されているのだ。

筆者はこの時もこのような一節がすべての日本人に当てはまるのではない、このような社会のあり方を受け入れないもの、批判するものもいるのだと説明を加えた。

この日受講者が書いた "Today's Comment"は以下のような内容であった。

(1) 教科書を読んだだけではピンと来なかったが、ロール・プレイでイエというものが何なのかよく理解できた。イエは日本だけではなくアメリカにもあると思う。でもアメリカではイエのリーダーは必ずしも父親ではない。

(2) イエという言葉が日本社会を説明するために使われた。イエを意識するということはどんな文化圏にでもあることだ。しかし、きっと日本ではこういう意識を持っている人の割合が多いのだろう。私はイエより個人の考えを尊重してくれる家族に生まれてよかった。

(3) アメリカにもこれらの考え、イエやBox Societyが持ち込まれたら利己的な人や犯罪が少なくなるのではないだろうか。秩序が生まれるのではないだろうか。日本の犯罪率はとても低いと聞いたことがある。

(4) 自分自身の幸せを考えるのは当然だと思う。その度にイエやその他の所属集団のことを考えるなんてむずかしい。日本にもこういう考えに賛成できない人がいることがわかってよかった。

(5) 日本にも国際結婚をする人がいると思う。その場合イエはどうなるんですか。

この日は、「イエ」を肯定的に論じるものあり、否定的にとらえるものあり、様々な反応が見られたが、受講者たちが口々に憶えたての用語、「イエ」を連発している様子は大変喜ばしく観察できた。

3-3-3.　3月2日第5週、 Education in Japan
ービデオの中の高校生とゲストスピーカーー

この日の授業のテーマは日本の教育である。テキストには "The educational system"という章があり、歴史的にみても日本の就学率（義務教育）と識字率は高いということ、日本全国北から南まで文部省の指導要領による統一された教育が行われる

ことなどの情報から、学歴社会を背景とした教育の加熱ぶりを中心に日本の教育における問題点などを論じている。このテキストに限らず、日本の教育を一般的に論じる書物からは、教育制度や、教育に関する他の社会システムは伝わっても、主人公であるはずの教育を受けるものの姿が見えてこない。テキストから得る情報が重要であることはいうまでもない。しかし、それに加えてできるだけ多くの「生（なま）」の証言を受講者に伝えたい。そこでこの日の授業では日本の三人の高校生の生活を紹介するビデオを利用した。そして、もう一人、日本の大学の春休みを利用してオシコシに滞在していた大学生にゲストスピーカーとして話をしてもらうことになった。

ビデオは UWO の付属図書館にあるものの中から選んだ『高校生群像』である[17]。このビデオは日本の三人の高校生の日常を追ったものである。彼ら、三者三様の生き方、考え方があふれる映像は、画一的と思われがちな日本の高校生のイメージを多少なりとも変えてくれる補助教材として有効であった。その三人の高校生とは、

(1) 男性。神社の一人息子であるため将来は神主になることを期待されている。神道科がある大学の付属高校に通っている。

(2) 男性。プロのミュージシャンを目指している。日本ではめずらしい、制服も校則もない個性を重んじる自由な校風の学校に通っている。

(3) 女性。日中、看護婦見習いとして働き、定時制高校に通っている。高等看護学校の受験資格を得るため、４年かけて高校を卒業したいと思っている。

以上のような高校生である。この三人のビデオを見た後、受講者にもっとも印象に残ったことを述べてもらった。

- 神道の学校に通うために片道 2 時間かけて通学する男子高校生にも驚いたが、もっと驚いたのはその家族の生き方である。特に、毎日午前 3 時に起きて息子のお弁当を作る母親には自分自身の夢というのがあるのだろうか。彼女は跡継ぎの息子が生まれるまで妊婦としてはかなり高齢（41 歳)で出産したという。私には彼女がイエのために生きているように映る。日本では女性は神主になれないのか。養子制度はないのか。
- 日本にも自由な学校があってよかった。塾や補習授業ばかりの高校生だけではなく、自分の楽しみや目標を持っている高校生もいるとわかって安心した。
- 日本の経済危機がアメリカでも報じられているが、まだ経済大国というイメージが強く、家庭の経済的な理由のために働きながら学ぶ高校生がいることは想像す

らできなかった。日本にも様々なタイプの学校があるとわかった。

などの感想が得られた。

次に登場したのがゲストスピーカーである。ゲストスピーカーとして来ていただいた河村暁（かわむら・さとる）さんは日本の教育大学に通う大学生である。UWO に留学中のご家族を訪ねてオシコシに滞在中であった[18]。河村さんは「私の高校生活」と題して話をして下さった。教育学専攻ということもあり、現在の日本の教育が様々な側面からの改革を求められているということも話して下さったが、受講者が関心を寄せたのは彼が一男子高校生としてどのようなことを考え、悩みながら過ごしていたかということだった。「高校生の時はそういう年頃だったせいか、女子にもてるか、もてないかということは非常に大きな問題でした。もてる男子学生はだいたい体育会系のクラブに所属していましたが、私が所属していたのは写真部で、暗いというイメージがあるのか、全くもてませんでした。まだ将来に対する確固たる目標もなく楽しい高校生活ではありませんでした」などという箇所では、スピーカーである河村さんは場を和ませようと半ば冗談をおりこんだおつもりだったらしいが、聴衆としての受講者の態度は真剣そのもので全員が同情心とともに受けとめていたようだ。河村さんも「普通日本だったら笑われる箇所があったと思うが、あのような場においては他者を笑わない、笑ってはゲストスピーカーに失礼であるというきびしい約束事ができているような気がする。これには感心するとともにある種のカルチャーショックを感じた」と話しておられた。この後、河村さんにも協力していただき、教科書やビデオでは伝えられなかったこと（各学校の授業料の日米比較など）について説明を加えた。

この日の Today's Comment は河村さんへの感謝で埋め尽くされた。生きた教材には教科書もビデオもかなわないということだろうか。特に近隣地域に日本人の数が少ないこのような地域における授業では、一個人として自らの体験を述べてくれた河村さんのようなゲストスピーカーは貴重であった。他に以下のようなコメントもあった。

(1) 日本の大学の学費は興味深い。国立大学の授業料はアメリカの州立大学に比べても安いと思う。これに対して私立大学、特に医学部の授業料はアメリカの有名私立大学と比較しても非常に高い。教育と経済は切り離せないことがわかった。

(2) 塾の存在はショックである。塾によっては生徒を選別することがあると聞いてさらにショックである。塾が今や大きなビジネスであることもショックだ。

(3) 女性の進学率が男性と同じくらいか、それを上回ることもあると聞いてうれしい。アジアは一般的にまだ女性の地位が低いと聞いていたからである。しかし、工学部などで女性の占める割合がまだ低いと聞いて複雑である。

4. おわりに

以上、約4ヶ月に渡って取り組んできた授業、“Understanding Japan”の一部を振り返り、新たな考察を加えた。このクラスを始める前の筆者の最大の悩みは「英語」であった。留学経験もない筆者が3時間のクラスを一体どのように英語で運営していけばいいのかということであった。そしてある日インドネシアからの留学生、リカルドさんからの質問にますます自信を失った。「今、日本で鶏一羽はいくらで買えますか」と聞かれて推測で答えることすらできなかったのである。それまで詰め込んできた日本の歴史や日本研究の理論などが非常に空虚なものに思えたものである。そのような経験も手伝って、いかに受講者がおかれている環境を考慮し、具体的な情報と手段でクラスを運営していけばよいか試行錯誤を重ねた春学期であった。

受講者たちは実に忍耐強く筆者の拙い英語による講義、クラス運営に協力してくれた。学期後半の三週間は受講者による発表を行った。各受講者がテーマを選び独自の視点から日本社会を考察したものである。「ビジネスに見る日本社会の特質」をテーマに選んだ受講者が二名いたがそれぞれの発表とは別に二人で名刺を渡し渡されるという場面、顧客を上座に案内するという場面を演じてくれた。「相撲を通して日本社会を読み解く」というテーマで発表した学生はタテの人間関係を説明する際、「力士とアメリカのバスケットの選手と比較してみてください、ロッドマンやジョーダンが先輩の荷物を持ち、食事の世話までするなんて想像できますか」と問いかけ、教室中をうならせた。また、他にご協力いただいたお二人のゲストスピーカーも教科書や筆者が伝えることのできないものを受講者に与えて下さった。第二次世界大戦中のアメリカにおける日本人、日系アメリカ人への処遇に関して、「もしこれが同じ敵国であるドイツ人、ドイツ系アメリカ人へのものだったらここウィスコンシンは柵で取り囲まれてしまう」と地域の実状を踏まえたお話をして下さったのは歴史学科のDr. Lane Earns、そして隣接するミネソタ州出身のMrs. Pamela Yanagihashiは日本人のご主人との結婚後、日本で生活し、三人のお子さんを育てられた経験を話して下さった。

学期終了後、日本でもその導入が議論されている「受講者による授業内容とその担

当教員の評価」を受け取った。受講者が「授業は事前に周到に準備、計画されたものだったか」、「担当教員はクラスの外でも質問、相談に応じたか(Office Hours, email など)」など約30項目について無記名で授業内容とその担当教員を評価するのである。希望者はこの他に個々のコメントを加えることができる。ここに筆者に対する批判的なコメントを紹介しよう。

> 担当教員（筆者）はどのような理論、事実を紹介する時も、常に肯定的、否定的両方のコメントを加えていた。中立であることを心がけていたのはよくわかるが、せっかく日本からやってきた一人の人間と会ったのである。多少、偏っていてもよいからもっと個人的な見解を聞かせて欲しかった。

というものである。より客観的な授業を目指すあまり、筆者自身も一人のゲストスピーカーとして個人的な見解を求められていたということに気が付かずにいたのだ。今後の課題として謙虚に受けとめたい。総合評価は5段階評価の 4.5 という思いのほか高い評価だった。しかし、この数字は担当教員である筆者一人に対するものではなく、筆者の情報収集にあたたかく応えて下さった地域社会の皆さん、協力して下さったゲストスピーカーの皆さん、そして何よりクラスの一員として積極的に授業に参加して下さった受講者お一人お一人を含む、クラス全体に対する数字だということは言うまでもない。

「国際理解教育」とはどうあるべきか――この問いに対する明確な答えはわからない。ただ、自身の経験から、教室という「場」に座っているものの生活の場、つまり地域社会、そしてさらに、個人的背景を適度に考慮し、常に彼らが「他者」、「異なるもの」への自己投影を試みることができるという環境作りが「国際理解教育」に取り組む一つの要件であると筆者は考える。どのような文化圏（或いは国）にも様々な考えを持つ「人間」が生きている、その中に必ず「あなた自身」がいるのだということを繰り返し伝えていきたい。　（おわり）

---

[1] Japanese 44-203, Japanese 44-207 (Fall 1998) Department of Foreign Languages and Literatures, University of Wisconsin Oshkosh, Japanese 44-111 (Spring 1999) Department of Foreign Languages and Literatures, University of Wisconsin Oshkosh, University of Wisconsin Stevens Point.

[2] Understanding Japan 59-312 (Spring 1999) Department of International Studies, University of Wisconsin Oshkosh.

[3] ヴェトナム戦争当時、アメリカに協力したラオスのモン族は終戦後難民化し多数がアメリカに移民、カリフォルニア州、ミネソタ州、ウィスコンシン州などにコミュニティを形成している。アメリカ政府の援助、異なる生活様式などの理由で一部の地元住民との摩擦は社会問題になっている。

[4] 例えば、教科書から読解するだけではなく、各学生が夫、妻（嫁）などの日本の「イエ」の構成員を演じ、「イエ」とは何かを具体的に把握した例を詳述する。

[5] The northern central part of the US, to the south of the Great Lakes (*Dictionary of Contemporary English*, Longman, 1988.)

[6] アメリカにおけるアジア系アメリカ人総数の 55.7%がカリフォルニア州などの西部に居住、東部 18.4%、南部 15.4%、中西部 10.6%と続く。(*U.S. Bureau of the Census*, 1990 Census of Population Characteristics, United States.)

[7] 毎年受講者に配布されている "syllabus"による。

[8] Hendry, Joy, *Understanding Japanese Society*, New York: Routledge, 1987

[9] **3-1.受講者たち**で説明した。

[10] マーク・ピータセンは著書、『続・日本人の英語』のなかでこのような表現について the Japanese 、Japanese people、the Americans、 Americans、 the Russians 等を例にあげて説明を加えている。(マーク・ピータセン『続・日本人の英語』、岩波新書、1990 年、pp.20-23.)

[11] (Yellow peril)黄色人種が勃興して白色人種に禍害を加えるというもの。日清戦争後、ドイツ皇帝ウィルヘルム二世が日本の進出に対する反感から黄禍論を主張したことに始まると言われている。(『広辞苑』第五版より)

[12] E.W.サイード（板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀子訳）『オリエンタリズム』、平凡社、1993 年

[13] この図の作成にあたっては筆者が受講した大阪大学文学部の文化交流史（1994 年度、杉原達教官)、大阪大学言語文化研究科の言語文化交流論（1995 年度、ヨコタ村上孝之教官）の講義を参考にした。

[14] その出自は中国南部に暮らす少数民族で日本では苗（ミャオ）族として紹介される。アメリカのモン族の皆さんの間ではこの「ミャオ」という呼称が蔑称として理解されている。

[15] Zaniewski, Kazimierz J. and Rosen, Carol J., *The Atlas of Ethnic Diversity in Wisconsin*, Madison: The University of Wisconsin Press, 1988, 13-15,28.

[16] March, Robert M., *Reading the Japanese Mind*, Tokyo: Kodansha International, 1996, 12.

[17] 財団法人 NHK インターナショナル、国際交流基金、『高校生群像』、凡人社、1994 年

[18] 河村暁（かわむら・さとる)、福岡教育大学 4 年生（当時)。

主要参考文献など

Hendry, Joy, *Understanding Japanese Society*, New York: Routledge, 1987

U.S. Department of Commerce, *Statistical abstract of the United States*,

U.S. Department of Commerce, 1998

Zaniewski, Kazimierz J. and Rosen, Carol J., *The Atlas of Ethnic Diversity in Wisconsin*.

Madison: The University of Wisconsin Press, 1998

財団法人 NHK インターナショナル、国際交流基金、『高校生群像』、凡人社、1994 年（ビデオ）